自分流枕草子

二ー五（二八）

春は巡り合ひ。
ひらひらと舞い落ちる桜は、
いとうつくしき。
真新しい服に身を包み、新たな自分を
見つける旅、始む。
淡い桜並木の一本道を
希望を抱き歩く姿いとををかし。
ふと目が合い、向けられてきた
笑顔あわれなり。

夏は光り。
さんさんと降り注ぐ日を背に、
白く輝く砂を走る姿いとをかし。
日が暮れるなり、月もなを、
星も多く輝きたる。
また、二つ三つなど、
共に数えるもをかし。
花火の下、思ひ出語るもをかし。

秋は実り。
ようよう橙に染まる山々を描きつつ、
虫の音を聞くもをかし。
また、木になったのを見ては、
過去の記憶へと導かれる。
夕日を背に伸びたる影をふみつつ、
明日の約束をするさへあわれなり。
夕焼け色に染まる横顔はいとをかし。

冬は広がり。
しんしんと降る雪。
辺り一面と広がる銀世界はいとをかし。
寒さを忘れるほどの温かく力強い手は、心安し。
思ひ出を胸に歩くは言うべきにも
あらず、白くなりたる横顔は
いとをかし。
これからも共に歩むと心に決め、
並んで歩いた道はあはれなり。

巡り合った時から始まっていた、
二人の恋物語。
これからも雪のようにどこまでも広がり
続けるであろう。
沢山の思ひ出を胸に。

終わり。